



# 紙とペンさえあれば 柴門ふみ

物心ついた頃からマンガを描いていた。

「マンガと呼ぶのは少しおこがましい。要するに小さな女の子の好きなお絵描きである。おさげ髪の少女やチューリップの絵を、小学校に上がるまでの幼年期、私は毎日描き続けていた。」

田舎で縫製工場を経営していた我が家には、いらなくなつた会社の書類が山程積み上げられていた。業績報告書が何かだつたのだらうか。茶色いワラ半紙何十枚かをポツチキスで留めたものが幾束も廊下の隅に放り出されていた。母は掃除や整頓がマメではなかつたので、一年中それらの書類の束が私の手の届く範囲にあった。

「「知らないものだから好きにしてよ」と父から言われた私は、それらの書類の裏に鉛筆で、拙い絵を描き続けたのである。」

小学校三、四年生頃から「お絵描き」から本格的漫画に移行する。「コマを割いてストーリーを追う漫画を描き始めるのだ。もちろんそれらもワラ半紙の書類の裏に描かれた。」

小学校時代、ワラ半紙に描かれた私の漫画を縦に積み上げると三センチくらいの厚みになっていた。何百枚も描いたことではない。

ところが中学に入るとようやく漫画を描かなくなり、私が小学時代に描いた漫画原稿もどこかに消えてしまった。漫画家になりたいなどという子供染みた夢もすっかり忘れ、音楽や映画に夢中になって青春を過ごしていた。そんなこんなしているうちに、大学受験が近づいてきた。

受験勉強嫌だなあと思いつつ、学校で渡された暗記プリントを眺めていた。それは私が幼い頃馴染んだワラ半紙だつたのだ。私は暗記プリントの裏に、再び漫画を描き始めた。少し成長していたので、鉛筆ではなくボールペンで描き出した。

ワラ半紙に、めりりとボールペンの先がめり込む感触が面白くて、何時間もその作業に熱中した。ワラ半紙の裏が



柴門ふみ(さいもん・ふみ) 1957年徳島県生まれ。お茶の水女子大学哲学科卒業。79年漫画家デビュー。「P.S.元気で、俊平」で第7回講談社漫画賞、「家族の食卓」「あすなる白書」で第37回小学館漫画賞を受賞。代表作に「同級生」「東京ラブストーリー」など。エッセイの著作に『ぶつぞう入門』『おいしい読書』など多数。

まっ黒になるほど緻密にびっしり絵を描き続けたのだ。

以来、今日までずっと描き続けている。ポツポツとジックに没頭していた中学時代も、思えばノートの片隅にずっと書きし続けていた。

紙とペンさえあれば、私はずっと描き続けてきたのだ。そんな人生だつたのだ。

おとなになってからマセイも発表するようになり、文章も書くのだが、ノートの片隅に言葉を書きつらねることはしない。きちんと原稿用紙の升目に埋めてゆく。最近ではもっぱら百円ショップで買求めた一束百円のものを使っている。1口の物書きの多くは、自分の名前入りの原稿用紙を特注して使用しているらしいが、私はあくまで本職は漫画の方なので名入りの原稿用紙など恥ずかしくて注文できない。

もともと漫画の原稿用紙の方も、ヒロカネという夫の名前入りのものを拝借して使用しているのであるが。

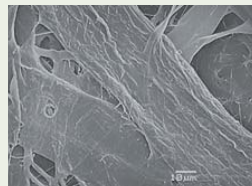
## PAPER Q & A Vol.2

Q. 紙は何回リサイクルできるのですか?

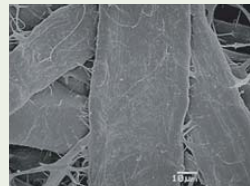
A. 繊維が劣化するので、3~5回程度です。

紙は主に木材などの植物繊維が絡みあってできています。紙は水に濡らすと再び離れてもとの繊維に戻るため、再び紙にすることができます。しかしリサイクルを繰り返すと繊維の表面にあるヒダが磨り減ってよからみ合わなくなり、紙の強度が落ちます。再生利用できるのは、3~5

回程度です。古紙だけで紙を作り続けることはできないので、新しいパルプの役割は重要です。



木材からつくられた新しいパルプの繊維



リサイクルを重ねた古紙パルプの繊維

写真提供: 王子製紙株式会社



今回は7月1日号、渡辺えり子さんです。

提供 日本製紙連合会 <http://www.jpaa.gr.jp>

photo : Yohei Maruyama